

---

# 永遠につづく記憶

魚住すくも

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠につづく記憶

### 【Nコード】

N5630M

### 【作者名】

魚住すくも

### 【あらすじ】

書籍が全て、データにとってかわった近未来。人の訪れることの無い、図書館に一人の少年が訪れた。

室内には、エアコンの音だけがひびいていた。綾介は先導する少女を追って、足を進める。かなりの広さなのに、ところせましとならべられた本だなで、せまつくろしく感じられる。

本だなには、びっしりと本がならべられていた。うっすらとほこりがたまっている。

その部屋からでて、階段をのぼれば、先ほどの部屋と同じぐらいの広さの部屋があらわれる。

この部屋は、さきほどのよりも、広々とつかわれていたらしく、本だなの他に、机やいすがおいてあった。

すすけた、ガラスのドアには、プレートがあり、それに、

『ガイア・オールド・ライブラリー 自由におはいり下さい』

と、ほってあった。

2 (前書き)

さかのぼること、二時間前。

綾介は、一人で、荒れ野を歩いてきた。時おりふいてくる強い風が砂をまきあげる。彼の黒いコートは、土色っぽくなっていった。

(ここらへんだろうか?)

綾介は、周りを見わたした。黄土色の岩がちらほらと見える。

彼は、ふとたちどまる。目の前にある、大きな岩を押す。ごりつと岩がこすれる音がして、四角い岩の板がおちた。

大きな岩山の中は、空洞だった。

綾介はコートのポケットから、懐中電灯をとりだして、つけた。ぼつと、オレンジ色の小さな光がつく。

綾介は、小さな光をたよりに奥へと進んでいった。やがて、前方に、にぶく光るものがあらわれた。綾介は、すこし身がまえるが、それが、ガラスに反射した光だと気づいて力を抜いた。

ガラスのドアの前には、小さな看板がある。それを読んで、彼は、緊張をといた。どうやら、目的地にやっと着いたようだ。

「すみません。だれか、いますか？」

綾介は、目に見えないだれかに話しかけるように言った。

ちよつとすると、ガラスの向こうに、電灯がついた。

『ようこそ、いらっしやいませ。ここはガイア古書籍図書館です』人間そっくりに、作られた合成音があった。

スーっと、ガラスのドアが開く。綾介は、足をすすめた。

ふいに、前のほうに、ぼつ、と人かげが見えた。綾介は足を止める。

「だれだ？」冷静をよそおうとしたけれど、声がうわずった。

「おどろかせてごめんなさい。私は、館内自動検索システム『リブ』です。」

「どのような本をお探しですか？」

「え、ああ……」

綾介は、面くらったように、前にいる人を見た。……本当に、人にしか見えない。

黒いトレーナーとズボン。その上から、まっ白なエプロンをつけている。

そして、顔は、何の変哲もない、少女のそれだ。

（なんで、こんな所に人がいるんだ？ というより、こんなところで人が住めるわけがない……）

げんなり顔をする綾介に少女は、

「ああ、この姿は、ホログラフによる立体映像なんです。実体は、ありません」

「ああ、なるほど……」綾介は、ふつと緊張をといた。

「それで、何をおさがしにいらしたのです？」

綾介は、ようやくこの図書館に来た理由を口にする。

「人を探しているんです。」あやこ” という名まえの女性を探しているんです」

リブと綾介は、暗い書庫の中を歩いた。

「ずいぶんと、ひっそりしていますね」

綾介の言葉が響いて、奥の方へ吞まれていった。省エネ設定になっているのか、リブと綾介が動くたびに灯る照明も移動していく。

「人がこないですから。あなたの前に来たのは、ざっと二十年は昔だったわ」

そのことばを聞いて、おもわず綾介はふりかえった。

「二十年ですか？ そりゃあまた……」

想像はしていたが、あまりのことに言葉を失った綾介に、リブは笑みをかえした。

「今どき、本をわざわざ読みにくる人なんていませんよ。アカデレコードにアクセスすればすぐ見れますからね。」

「この本のデータも、その時ぐらいにはアカデレコードに登録されているわ」

「……父さんが言ってたんだけど、昔はこういうもので勉強していたんですよね？」

「そうよ。あら、あなた学生なの？」

「今年で高校生になります」

「そうなの……さあ、ここよ。これとこれと、これ」  
リブの言うままに本をとる。

「こ、この中からしらべるんですか……？」

本のぶ厚さに綾介はおもわずたじろいだ。一冊がゆうに千ページはこえている。半端な量ではない。

「文句いわない、いわない」リブは、ぼうぜんとしている綾介に、  
にが笑いした。

リブが選んだ三冊をつくえの上におく。索引からあやことという名

前の人間を見つけていく。

「漢字とかは、わからないの？」と、人名事典をのぞき見ながらリブは聞いた。

「うん……。わかってることは、あやこっっていう名まえと、有名な書誌学者の娘だったことだけ」

綾介は、顔もあげずに言った。

「その書誌学者の名前はわかるかしら？」

リブの問いに、綾介は首を横に振った。

しばらく、二人ともなにも言わなかった。本をめくる音やリストアップした名前を書きこむ音だけがひびく。

一冊分を見て、綾介は、ぐうっと、背をのばした。

「ああ、腹へったなあ」

かれこれ、ここに来てから一時間はたっている。そろそろ夕ぐれ時にちがいない。

「ラウンジに移動しましょうか？ ごはんは持っているのでしょうか？」

リブの問いかけに綾介はうなずいた。

ラウンジは書庫があった階の下にあった。

二人は向かいの席に座った。

綾介は、持ってきたパンをもくもくと食べた。

ふと、リブが、

「失礼かもしれないけど、何故、あやこさんという方を探しているの？」と聞いた。

しばらく、リブを見つめていたが覚悟をしたように、

「母親らしいんだ」と、言った。



### 3 (後書き)

今晚は、魚住です。

もともと書いていた話だから、すぐ更新出来ますとか言っておきながら、あれよあれよといううちに二ヶ月も経っていきまして、ほんっとーに申し訳ありません。

ひっそりと更新させていただきます。

「まあ……」リブは、口に手をやった。

そんな様子におかまいなしにつづける。

「父さんが亡くなる間に、はじめて母さんのことについて聞いたんだ。ガイア古書籍図書館に行かってね」

まるで、リブにというより自分にいきかせるように話した。

今でも、ありありと思いだせる。顔色が土気色になっても、自分に、伝えようとする父の姿。じよじよに冷たくなってくる父の体。

「ごめんなさい、聞いたりして」

「いや、いいよ。この図書館に来たら、聞かれると思っていたからね」と笑った。

ふたたび、二人は書庫へともどった。今度は二人ともしやべらずに作業をつづけた。

三冊すべて終わった時にはすでに真夜中になっていた。

「あなたのお母さまは、いらっしやいましたか？」リブは、綾介の手もとにあるリストをのぞき見た。

リストにずらりと書かれた名まえ。明らかにちがうものに、横線をひいて消す。

「さあ……。いっぱいいるからわからないよ」

しばらくして、

「ああ、絶望的だよ、この数！」

綾介は、ぼんと、シャーペンを机の上に投げつけた。両手を頭の上で組んで、ため息をついた。

「見つかるのかなあ……」ぼそっと、綾介はつぶやいた。

「せめて、祖父さんのプロフィール判ればなあ」

リブはそんな綾介を見て、

「そんなに思いつめたら、よくないわ。明日にしたらどうかしら。」

休めばいい案がでてくるわ」と、ふわりと、笑いながら、言った。

そんなリブを見て、綾介は苦笑いを浮かべる。

「そうだな。もう、明日にするか」

そう言っつて、立ちあがって、かるく背のびをした。相当疲れていたらしく、腰がゴキツとなった。

ラウンジにあるソファは、そうとう良いものらしく、寝心地は抜群だった。

「じゃ、おやすみなさい」リブは、そう言っつて、去ろうとした。

「待って！」

自分で意識するよりも早く、綾介はリブを呼んだ。

「どうしたの？」首をかしげるリブ。

「そう言えば、君にはじめて会った気がしないんだ。何か、どこかで会っつてたような気がする。」

「……ごめん。変なこと言っつて」

そう言っつて、布団がわりのコートを頭からかぶつた。

背中ごしで、リブがふつとほほ笑む心配がした。

「そうね。わたしも、あなたに会っつたことがあるような気がするわ」

うす暗い図書館の中に、規則正しい安らかな寝息が聞こえる。

よっぽど疲れていたのか、綾介はすぐに眠っつてしまった。

リブはそこかたわらで膝を抱えて座っつている。まるで瞑想するかのよっつに目を閉じていた。

ふいに痙攣したかのよっつに、ピクリと身体を動かす。目を開けて、視線を綾介の方に向けた。

「やっぱり、この子がそうなのね。この日のためにわたしを造つたのかしら……」

リブの呟く声は図書館の闇に吸われ、やがて消えていっつた……。

次の日も、辞典との根比べが続いた。

「父さんの話だと、同い年だって言われたから……だいたいアカデレコードが出来たぐらいか」

そう綾介は言いながら、その時代の年鑑を二、三冊、棚から引っぱり出す。人名事典とさほど変わりのない重量感。

（明日はきつと筋肉痛だな、こりゃ）心の中で秘かに溜息をついてみる。

お祖父様が著名な方なのでしたら、とリブが提案したのは簡単な朝食を終えた時だった。

年鑑などでそれっぽい人をピックアップして、プロフィールを洗いだす。気の遠くなるような作業だが、やらない言い訳にはならない。

「ねえ、そういえば、ここってアカデレコードの専用端末って……」  
本から顔をあげて綾介が尋ねようとすると、リブは困った顔をした。「……ないんだね、やっぱり」苦笑しながら綾介は言う。

「ごめんなさい。利用者の方の要望に答えられないなんて、館内検索システム失格ですよね……」

ここは、ネットワークから外れているんです。サイバー攻撃から防御するために」

綾介は眉をひそめた。

「そんなことをする必要が……本か？」

リブは肯いて、答える。

「アカデレコード全盛になったとはいえ、オリジナルの価値は下がりませんし。」

でも、最大の理由はわたしですね」

リブの言葉に、綾介は首を傾げる。

「わたしは高性能A Iシステムです。もし外部に乗っ取られなくてもすれば、大変な事態になりかねない。それで、ここはネットワークからあえて外してるの」

「……そうなのか」嘆息をつきながら、綾介は言った。

つまり、綾介が来るまでリブはこの図書館にひとりぼっちで待っていた、ということだ。二十年も。

「寂しく、ないの？」少し言い辛そうに尋ねると、リブはにっこりわらって首を横に振った。

「わたしは、人間を模したものであって、人間ではありませんから。時間、という感覚もあなたとは違うの」

だから、気にしないでという風にリブは微笑んだ。

岩石で出来たトンネルを抜けると、見渡す限りの荒野が目に入る。綾介の母親探しは、完全に行き詰まっていた。気分転換のために一度、外を散歩しようと思ったのだ。

空を見上げると、物凄いスピードで雲が流れていく。綾介は入り口の岩石の側に座り、見るともなく、それを眺めていた。

(アカデレコードが使えないのが、ネックなんだよなあ) 心の中で独りごちて、溜息をつく。

なんでよりによって、原始的なやり方で探さなきゃいけないんだ。綾介はひざに顔を埋めた。

近所のパブリックライブラリーに行った方が、早く見つかるかもしれない……。

しばらく顔を埋めたままで、じっとしていた。風の音、遠くで鳴く鳥の声に耳を澄ませる。

うなじに冷たいものを感じ、綾介は顔をあげる。雨が、降りはじめている。あわてて図書館に逃げこんだ。

自動ドアの前で、水滴を払う。

「リブ、雨が降ってきちゃったよ」綾介の声に反応して、ドアが開いた。

「おかえりなさい。……大丈夫？」心配そうに聞くリブに、  
「ただいま。」

今日はもう、休むことをするよ」と答えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5630m/>

---

永遠につづく記憶

2011年12月11日23時46分発行